山月記

第一段落

隴西の李徴

博学才穎

性格…狷介・自ら恃むところすこぶる厚い

天宝の末年

・進士試験に合格

・江南尉に補せられる

賤吏に甘んずるを潔しとしない

いくばくもなく

・官を退く

・故山に帰臥し、詩作にふける

第一段落

- 文名は容易に揚がらない
- 生活は苦しくなる

焦燥
絶望

数年の後

- 一地方官吏の職を奉ずる

＝かつての同輩の下命を拝する

自尊心を傷つける
抑え難い狂悖の性
↓発狂

一年の後

- 二度と戻ってこなかった

第二段落

翌年

陳郡の袁傪＝監察御史

・李徴と同年に進士に合格

・李徴にとって最も親しい友

・性格…温和

（↓李徴と衝突しなかった）

朝の暗いうちに出発

↓駅吏の言葉（人食い虎の件）

を退ける

←

〔理由〕供回りが多勢

であった

第二段落

一匹の猛虎の出現

※「あぶないところだった。」＝人間の声＝李徴の声

久闊を叙する

※李徴が叢から出てこない理由

・異類の身（＝あさましい姿）を故人の前にさらせない

・袁傪に畏怖嫌厭の情を起こさせる

＝超自然の怪異

素直に受け入れる

第三段落

今から一年ほど前

汝水のほとり

← 戸外で誰かが呼ぶ

← 声を追うて走り出す

← 気がつくと虎となっていた

← 夢かと思った↓夢でない

← 茫然・懼れた

← 理由も分からずに生きていく↓

生きもののさだめ（不条理な運命）

←

第三段落

死を想う

一匹の兎

自分の中の人間は姿を消す

（虎としての最初の経験）

語るに忍びない所行をし続ける

人間の心

（一日のうち数時間）

↓しだいに短くなっていく

情けなく、恐ろしく、

憤ろしい

第三段落

どうして虎などになったか

どうして以前、人間だったのか

すっかり消えてしまうのではないか

しあわせ

このうえなく恐ろしい

⇦

この気持ちは誰にも分からない

（孤独感・絶望感）

第四段落

李徴の頼み

今も記誦している詩を伝録してほしい

↓一部なりとも後代に伝えないでは、死んでも死にきれない（＝悲痛な執念）

（哀傷の感想）

・格調高雅・意趣卓逸

・非凡な才

↔

第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがある

第四段落

←

自嘲

↓あさましい身

お笑い草ついで↓即席の詩

第五段落

なぜこんな運命になったか

（李徴の考え）

（人々）倨傲　尊大

努めて人と交わりを避ける

（内心）ほとんど羞恥心に近いもの

- 師に就かない
- 詩友と交わって切磋琢磨しない
- 俗物の間に伍することもしない

第五段落

（分析）

臆病な自尊心
尊大な羞恥心

猛獣（虎）

・妻子を苦しめ、友人を傷つける

・才能の空費

卑怯な危惧
刻苦を厭う怠惰

（憤悶と慙恚）飼いふとらせる

外形を内心にふさわしいものに変えてしまった（＝虎の姿）

第五段落

胸を灼かれるような悔い・悲しみ

↓誰かに訴えたい

誰一人おれの気持ちを分かってくれる者はない

＝孤独感の悲痛な訴え

第六段落

李徴のもう一つの頼み

（＝妻子のこと）

・妻子に自分は既に死んだと告げてほしい

＝

今日のことだけは明かさないでほしい

↓

・これ以上妻子を苦しめたくない

・人間としての尊厳を保ちたい

・道塗に飢凍することのないように計らってほしい

⇨

第六段落

（自嘲）⇨

本当は、まず、このことのほうを先にお願いすべきだったのだ

＝

人間だったなら

＝他人を愛し守れる存在

※帰りにはこの途を通らないでほしい

⟹

＝故人を認めずに襲いかかるかもしれない

「今の姿をもう一度お目にかけよう」

＝自分に会おうとの気持ちを起こさせないため

第七段落

堪え得ざるがごとき悲泣の声

・袁傪との永遠の別れ

・人間の世界との永遠の別れ

再びその姿を見なかった

← 主語…袁傪

効果

・虎となった李徴の孤独な姿が印象づけられる

・虎になった人間の存在を暗示

＝不気味さ